

民衆詩派の詩人・白鳥省吾『共生の旗』考(一) 郷土愛を超えて

千葉 貢

序章「共生の旗」のもとで

(一)

論題に掲げた『共生の旗』は白鳥省吾の第七詩集にて、「一九二一年(大正十年)の作を主とし、詩六十六篇と散文詩八篇とを輯録したものである。」「文芸に民主的傾向を徹底せしめんとする企画を示すものであつて、民主的といふ言葉の持つ内容は、世人の多くが考へるやうに単純なものでも一時代のものでもなく、人間の思想感情の種々の要素を包含した複雑な永遠なものであり、現代人の当然持つべき情熱の根本であることを特に言明したのである。」「はしがき」より)として、大正十一年六月十日に新潮社より公刊(全三三〇頁)されたものである。

この詩集には「比較的相均しき環境の中に歌へるものを六つの部門

に分類した」「はしがき」より)とあり、「広野の部落より」(一頁)、「新しい笛」(三十五頁)、「都市哀歎」(六十七頁)、「途上の礼拝」(一〇九頁)、「生の序楽」(一三九頁)、「地の叫び」(一七一頁)、「散文詩」(二〇二頁)という見出しが添えられており、各詩篇の傾向とまとまりを示している。それでは、まず初めに「地の叫び」の章より「国境の上に」を紹介したい。⁽¹⁾

国境の上に

何の国境あるか

雲のゆく処に、風の吹く処に

光の溢るる処に、潮の鳴る処に

土地そのものに何の国境あるか、

彼等はただ稔りただ与ふ

おお夥しい宇宙の饗宴よ

彼等は均しく歓呼し永久の平和にある、
人々よ、この限りなく美しい楽音を聴け。

然もおお武装の世界よ

彼等はその利己主義によつて常に自他を傷つく、

熱なく光なく思想なく芸術なき日本よ

戦にのみ強き甲虫よ

戦にのみ備へて日常生活の自覚なかりし日本よ

矛盾と虚偽に曇る日本よ

貢

されど私は信ずる、

優れたる国民性の光輝を

その自由と快活を

千

一切の虚飾をふるひ落して

潮に洗はれたるごとく鮮やかに飛躍する国土を。

土地そのものに何の国境あるか　それは水や空気、魚の回遊、そ

して太陽や月、星の熱や光り、「旅いそぐ鳥の列にも／季節は空を渡
るなり」とうたわれたように国境はない、と言い換えてもよい。この

ような「灯台下暗し」にも等しい当たり前なことを、今日にあっては
遅すぎた認識とばかりに「自然と人間の共生・共存」「動・植物の生

態系に配慮した開発を」「自然の保護や保全を忘れないように」など

という謳い文句を見聞きし、「土地そのもの」や水、大気の有為な価値、有機的な存在について強調するようになったのは好ましいことなのだが、有史以来の自然と人間の深い関わりを承知しながら、人間だけの都合や立場で配慮したり保護したりするのは、いかにも不自然なものではなろうか。今さら小賢しい分別にかこつけて「持続可能な発展を」とか、「循環型の社会を」などと叫んでみて、科(化)学や技術を駆使しながらの進歩と開発に余念がなく、その開発による変化を進歩や発展の証左とばかりに自賛し、不可逆的な「定向進化」を容認し続けているのではないか。開発は開発を強要し、変化は変化を加速させ、さらなる開発による変化を進歩や発展であり成果であるとばかりに誇示し、その弊害や反動、矛盾なども察知しながら勢いがかまけて黙殺しているのではなからうか。

定向進化　「定向進化(orthogenesis)とは、十九世紀末ドイツの生物学者テオドール・アイマー(T.Eimer, 1843～93)が提出した概念で、生物は内的、あるいは外的要因によって決定された方向に発達、進化する。その結果、ある器官の一定方向への進化がその生物の生存そのものを脅かし、やがて種の絶滅に至る場合があると説いてダーウィンの自然淘汰説に反対した。今日、生物学、進化論の分野でこの説が顧みられることはないが、アンリ・ベルグソンが著『創造的進化』の中で一定の評価を与えたように、むしろ社会的分野では示唆するものが少なからずあるように思われる。

とりわけこの概念は、始めることを知って、止めることを知らない

技術分野に適用することができる。現代技術にも思いあたる例は多い。その危惧は原子力をはじめ遣伝子工学にも、インターネットにも予感されている。⁽³⁾ というように河原宏氏の説明に教えられたのだが、私達にも「思いあたる例は多い」のではなからうか。例えば、手持ちの電化製品の取扱説明書に「マイクロソフト内蔵」「コンピュータ制御」などと記されており、「ボタン一つで手軽に操作」などという振れ込みも忘れない。科学や技術の進歩によって獲得した「手軽さ」「便利さ」「多機能」などが強調され、「絶対にお買い得です」と迫られて購入したもののばかりなのだが、三年が四年と使用しているうちに同種同型と言えども、いわゆる「モデルチェンジ」と称して「新発売」を見聞きしないものはない。基本的な機能や目的の遂行には変わりなく、やはり「ボタン一つで操作簡単」なのだが、さらなる「多機能」を活用すると「ボタン一つ」では済まない。まして一旦間違えたり故障したりすると、たちまち「お手上げ」となり、「電気屋さんを呼ばなくては」とか、「メーカーに連絡しなくては」などと困惑してしまつたことも二度や三度ではない。やがて修理人が来てみれば、「この型は旧式なので手元に部品がありません。メーカーから取り寄せなければなりません。二、三週間ほどかかります。かえって高くつきますよ。新型に買い換えた方が安あがりですよ。これより高性能で使い易い便利なものが出来ていきますから」などと言われたことも二度や三度ではない。

私達は、技術や機械は常に進歩（進化）するものだ、という洗脳さ

れた固定観念によって、「古い」ものを捨て、「新しい」ものを受容してしまいやすいところに「定向進化」観がもたらす取り返しのできない陥穽があり、「自然と人間の共生・共存」が絵空事に等しい「非循環型」にして「持続不可能」な社会へと「進歩」するという変化に攪乱され、変化を「改善・改良」の同義語と錯覚しながら虚構の道を急いでいるのではなからうか。社会は理論的に改善が可能であり、現実には科学的な進化の途上であり、自然は技術的に利用し得るものである、という人間の傲慢なそれぞれの思い込みが「定向進化」を助長し是認させているのではなからうか。河原宏氏もまた「だから、労働者のいない工場は既に実現し、兵士のいない戦争が湾岸戦争以降に実現した。やがて運転手のいない電車、教師のいない教室も実現するだろう。一部では、それが理想だとみなされている。だから、高度の技術構成をもつ原子力発電やジェット旅客機の事故では、しばしばその原因がオペレーターや操縦士の判断ミスにされる。技術への信頼は、人間への不信と表裏をなしている。誰かが端末さえ握っていれば、電車も授業もマニュアル通り進むだろう。教育現場でもむしろ個性的な教師などいないほうが、文部省の方針を全国、全教室に徹底されるのに好都合かもしれない。」と述べ、続けて

これは単にクローン羊の話に止まらず、やがて人々の価値観を収拾のつかない混乱に追いこんでゆくだろう。現に男性が産することも技術的には可能だとされている。近い将来、跳ね上がりの医師

と自己顕示欲の強い男が、世界初の男性出産をやってみせるかもしれない。このような動向をどこで止めるか誰も知らない。止めなければならぬという価値観すら見失われている。正に、技術の定向進化そのものである。

という説明を加えている。今日、パソコン技術の進化に伴い、インターネットの拡大を促し、グローバルイズム、インターナショナルイズム、コスモポリタニズムなどが喧伝され、「国際化」を口実にすることが進歩であるとかばかりに何もかもが「国際規格(global standard)」に収斂されつつあるのはどうしたことであろうか。これは民主主義の名のもとで「自由」「平等」「博愛」を掲げ、「個性の尊重」「基本的人権の尊重」を謳ってきた方針や制度との矛盾を露呈し、かつ逆行するように思われるのだがどうだろうか。即ち、徒らに「国際化」や「国際規格」を志向し迎合しようとするれば、むしろ不自由にして不平等を余儀なくされ、博愛どころか、かえって自虐的な言動を強いられ、

ナショナルイズムの台頭を来たし暴力や虐待、差別、虚勢、卑屈な自尊心や猜疑心などを生み出しやすい潜在的にして恒常的な要因になると思われるのだがいかがであろうか。

このような方針や制度との矛盾は、技術や科学によって、「土地そのもの」や水、大気などが統一され、社会を進化させ、人間をも操作できるといふ幻想や錯覚を助長するものである。

我が白鳥省吾のうたった「土地そのものに何の国境あるか」という

問いかけは、技術や科学を超えた、今日でいうパソコンを手段としたインターネット上での国際化やコスモポリタニズムではなく、動植物を含めた人間が生きる「土地」(国)を異にする一人ひとりの利他愛や博愛の精神の確立による「心の国際化」を希求したのである。それはまた人類愛や地球愛と呼び換えてもよい。こうした「愛」ある心を培い、育むことが世界共通の願いであり目標である。真の国際化を可能にする先決にして必須の条件でもある。昨今のように技術の進歩に幻惑されて機械に依存するあまり、その手段に溺れたり過信したりして心血の通わないビジネスにとって都合のよい表面的な国際化に加担すれば、ナショナルイズムの衝突や利害に伴う覇権争い等の紛争を生むだけであろう。現に存在する国境なるものは、「近代的」にして「合理的」な理由や要因に基づいて設定され、かつ合意を得たものであるだろうか。あるいはまた、技術や科学の「定向進化」によって国際化を促し、国際規格(基準)のもとで解消され「世界が一つ」になり得るのであるだろうか。

今や宇宙開発の一環として宇宙ステーションを設営し宇宙旅行を可能にしつつあり、「クローン技術」や「遺伝子治療」「生殖技術」などの開発、進歩、発展によって新しい名称や意味づけ、理由づけなどを考えなければならぬまでに事態は時々刻々進化しているのだが、動植物を含めた生き物のすべては自然の生態系に依存し、自然の環境に拘束されて生き永らえているといふ普遍的な本質を忘れてはならない。技術や科学として自然と無関係に独立した存在ではない。いかなる技術

も科学も水や土、大気、太陽、月、つまり自然のなかにあつて可能な
 であり、自然を吸収し受容しながら息づいているのである。だから、
 自然は内包している忍耐や許容の限度を越えれば直ちに反撃に転じ、
 いかなる技術や科学の力量でも抑制できないほど破壊したり、生物に
 とつて最も痛恨を極める『死』に到らしめたりするなどの逆襲を試み、
 天誅を加えるのである。人間はそれを天災だとか、自然災害だと言い、
 国や地方の行政が悪いなどと他人事のように無責任な泣き事を言つが、
 人間自らの傲慢な作為、強欲な所業による必然的な墓穴だということ
 に関眼すべきであらう。

昨今は技術や科学の進歩発展という変化に眩惑され、改善の期待に
 促される「定向進化」と称する虚構の過程を盲信し、虚勢の心身を貪
 り続けているだけに自然と人間の共生・共存どころか、かえつてその
 矛盾や歪みが拡大し、その板ばさみ（ディレンマ・dilemma）が深
 刻化するばかりである。これまで「近代化」を国是とし、「殖産興
 （丁）業」「富国強兵」「脱亜入欧」政策のもとで猪突猛進し、やがて
 は自由・平等・博愛の民主主義を掲げて個性や人格の尊重、自然と人
 間の共生・共存などを謳い、規制の緩和、競争や選択の自由、情報の
 公開などを甘言の如く吹聴しながら、まして、それらを補完し、実現
 を促すかのような技術や科学の「定向進化」を次ぎ次ぎに見せしめな
 がらも、むしろそれらに逆行するような、かつ反動的な事件や事故、
 あるいは矛盾する事象や事態が多発しているのはどうしたことである
 つか。今や「宇宙ステーション」を設営し、「クーロン技術」や「遺

伝子治療」を可能にするまでに技術や科学が進歩発展したといつのに、
 その技術者として科学者として相も変らず自然に依存しながら生きてい
 るのではないか。高度な科学技術を駆使したという人工的な生産（創造）
 物として、その資源は等しく自然に求め、自然より与えられたものでは
 ないのか。何よりも命永らえるための食糧（食料・食材）の何一つと
 して自然と関わりないものはないだらう。そして、すでに地球の
 温暖化、砂漠化が叫ばれ、世界的な食糧不足が危惧されながら、未だ
 に解決されないのはどうしたことであらう。私は技術や科学がもたら
 す進歩の矛盾や歪みを思わずにはいられない。それはまた人間自身の
 矛盾や歪みでもあり、自然との必然的なディレンマであることを承知
 し覚悟の上で生きなければならぬのである。

人間は考える、故にか特に進歩という強迫観念に陥りやすい。進歩
 的な人間ほど苦惱に溺れ、虚構のなかを漂っているのではなからうか。
 自然の必然たる生と死の実態を目の当たりにすれば素朴な感慨に溢れ
 るだらう。素朴な感慨 白鳥省吾の「夕景」⁽⁶⁾もまたその一つである。

夕景

凍えゆく夕暮れの広野は
 暗紫にところどころ雪の白を点ず、
 煤けたる汽罐の轟きにつれて
 雲のやうに躍りつつ靡く煙は

寒き地の肌に氷に閉ざされし枯草に雪の上に
煤ふらし咽びゆく、

凍る細き流れに添うて

誰か靡るな一人の影の黒く歩いてゆく。

また田畑のなかに小さき墓地ありて

百に足らぬ粗末な墓の枯草に並ぶが見ゆ、

墓地のかなた林に囲まれた数軒の農家には

灯が明るく点つてゐる、

空には星が深く優しく輝いてゐる。

貢

私は見た

家と星と田畑と墓と

千

おゝ素朴なる人生はこれらに盡きてゐる

この夕さびしく楽しく

わが胸も轟きつつ

うす暗き広野を過ぐ。

に追われるあまりに生の果ての死をも忘却、看過しているのではなからうか。

我が省吾の「夕景」は、昨今の「クローン技術」や「遺伝子治療」が試行され、「宇宙ステーション」が設営されるなどの進歩の途上にあっても「素朴なる人生」の何たるかを示唆しているのではなからうか。どこで生まれ、何をして生き、どこで死のうが、その人生のない人はいない。省吾もまた、次のように説明している。

墓地のかなたの林にかこまれた数軒の農家には灯が明るくともつてゐる、生と死とはかくも近いのだ、そしてあの明るい光力は農村も近頃、電燈になつた幸福さを示す、農家をかこむ林は風と寒さをふせぐものゝやうに見える、さつきの寂しさうな人もあつた家に帰つてゆくだらうと思へば人ごとながら安心でもある、そのときふと空を見れば星がたくさん輝いて、いかにも田園を守るものゝやうに優しく微笑してゐる。

耕地と死と生と大自然との関連連してゐる情景である。⁽⁸⁾

生と死とはかくも近いのだ　生きるということとは死ぬということであり、「家」は仮寝の宿にも等しく自然に還る旅でもある。⁽⁸⁾ 人間、墳墓の地を忘れてはならないだろうし、人間、到るところ青山あり、ではないか。

私達は「家と星と田畑と墓と」に育まれ導かれながら紡ぎだす「素朴なる人生」を閑却しているのではなからうか。科学技術を結集した人工的な多くのものに囲まれた進歩的な生活のあまり、自らの素朴な心情をも消失しつつあるのではなからうか。もの獲得（購入や消費）

(二)

自然は常に変化し、人間もまた変化する。お互いの変化が矛盾や歪みを生み出す要因であることを忘れてはならない。自然と人間は矛盾や歪みを伴いながら共存し続けてきたのであって、これからも猶矛盾や歪みを含みながら共生・共存していくに違いない。この矛盾や歪みの一端を証左しているのが地球の温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林の濫伐による砂漠化、沿岸一帯の磯焼け、大気や水質の汚染などであり、進歩したという今日の技術や科学を応用すれば、自然の生態を解明し、その生態に適った対応が施され、たちまち解決、解消させ、何ら矛盾や歪みもなく永遠の共生・共存が約束されそうなもののだが、進歩したという科学技術はどうしたのであるうか。そう簡単に究明、解決できないところに自然と人間の骨肉的な矛盾や歪みが介在しているのである。特に人間の感情や心理ほど不可解なものはない。故に自然と人間の矛盾を承知し、ディレンマを抱えながら、いかに自然の生態系と調和を図り共生・共存していくかが人間（ホモサピエンス、賢い人）の課題として突きつけられてきたのである。

幕末や明治維新の「近代化」からすでに百数十余年、技術や科学の「定向進化」による豊かさを満喫しながらも、かえってその申し子や反動というべき我欲に溺れたり無気力に陥ったりする人間を蔓延させてきたのではないか。人間自身の自己矛盾も深刻化し、ディレンマの拡大によってかえって自然との共生・共存や調和を困難にし、むしろ

乖離と共に隔離させているように思われてならない。私達は自然と人間の矛盾や自らのディレンマについて正しく認識し、その縮小や解消のために英知を絞り、処世観を確立し、実行することが急務なのではなからうか。人間のディレンマ　すでに山岸俊男氏が指摘しているので、その一端を紹介したい。

科学の進歩がすばらしい未来をもたらしてくれるだろうというシナリオを私たちが全面的には信じられないのは、科学をコントロールするかしこさを私たちが持ち合わせていないと直感的に感じているからです。そのようなかしこさを私たちが本当に持ち合わせているのかいなのかは、私にはわかりません。しかし、次のことだけはわかっています。それは、私たちは私たちが作り出している社会をコントロールするために十分なかしこさを、まだ持ち合わせていないということです。

私たちが自身を作り出しているはずの社会を、私たちはまだ十分にコントロールできません。科学がいくら進歩し自然界をコントロールするのに成功しても、社会をコントロールするための科学を私たちはまだ手にしていません。本書のテーマである社会的ディレンマとは、私たちが作り出している社会を自分たちでコントロールできないでいる状態のことです。そして社会的ディレンマの研究とは、私たちの社会を自分たちでコントロールするための科学を作り出すための研究なのです。（中略）

社会的ジレンマというのは、人々が自分の利益や都合だけを考えて行動すると、社会的に望ましくない状態が生まれてしまうというジレンマです。インソップのねずみたちの例では、誰も自分から進んで猫に鈴をつけに行こうとしないため、結局は皆猫に食べられてしまいました。私たち人間は、豊かな生活や便利さを求めて行動することで、私たちにとってかけがえのない地球の環境を破壊しつつあります。(中略)皆が望んでいることがどつして達成できないのか、このことを考えるのが、社会的ジレンマについて考えることです。⁽⁹⁾

千 葉 貢
 など、「プロローグ」社会をコントロールするための科学をめざして、「のなかで「ジレンマ」の性質や問題の所在について説明している。それはまた山岸俊男氏だけではなく、すでに多くの人々が気づいている「地球の環境を破壊しつつある状況は、自然の生態系と動・植物を含めた生きとし生けるものの仕組みが根本的に異なることから必然的に生じるのである。技術や科学の開発が遅れていた未熟な時代や社会にあつては、自然の生態を畏怖し、自然の生態に合わせた人間の生き方が必然的に求められ、自然と人間の一体化、心身一如、身土不二の考え方が長い歳月のうちに育まれ、「ジレンマ」や矛盾の少ない、むしろ起こさないような生き方に努めてきたのである。「山川草木悉皆成仏」も、「土に還る」も等しく自然との一体感を希求し達観した人間の姿勢を示すものである。

これまで人間は技術や科学の未熟や未発達、未開なために自然の生態によって幾多の変化。時に人間はそれを災害や天災と呼び、被害と呼んできた。に遭遇し甘受してきたのだが、それは自然と人間の生態や仕組みの相違によって生じる必然の事象であることを承知している。人間はその経験と教訓をもとに適応すべき新たな取り組みを施し続けてきたのだが、自然を畏怖することも決して忘れてはいない。それでは技術や科学が「定向進化」した今日にあつて自然の変化時に人間は災害と呼ぶ。を抑止したり制御したり、あるいは削減や解消、回避させたであろうか。例えば、連日、台風の進行方向や勢力についての予想にも関わらず、「情報」と称して真実絶対めいた詳細な解説を繰り返し、警戒や避難を呼びかけるばかりで、台風そのものを安全な方向に誘導したり衰退させたりするだけの科学技術を未だに持ち合わせていないではないか。自然の変化によって不都合が発生すると、やれ災害だ、人災だ、などと叫んでは国が悪い、行政が悪い、管理責任を明確にせよ、などと利己的に批難し自己防衛に走り、保障を求めて裁判沙汰になることもある。それだけ自然の変化が人為的に生じるかのように錯覚するまでに洗脳されてしまったのである。記憶に新しいところでは阪神・淡路大震災、島原半島の雲仙・普賢岳や北海道は内浦湾に面した有珠山の噴火によって被害を受け、避難を強いられたこと、さらには三宅島の火山爆発に伴い、今も猶全島民が避難生活を余儀なくされているという現実をして、自然と人間のディレンマ、あるいは矛盾の事実を挙げるまでもないだろう。いずれも人

為や行政によつて地震や噴火・爆発が生じたのではない。

私は、地震や噴火のたびに「火山噴火予知連絡会」と称する会合がもたれ、会合の様子や終了後の会見の様相などが報じられるのを見るのだが、その道の専門家、学識経験者、研究者などと呼ばれる人々が、それこそ最新の技術や機器を完備し最先端の研究に動んでいるはずなのに、それでも「予知できなかった、予想以上だった」などという結論（成果）を、コンピュータの画面にあれこれグラフや図表を描き、時には模型を用い専門用語を駆使しながらの説明を聞くたびに、自然と人間の大きな矛盾、やる瀬ない乖離を痛感せざるを得ない。皮肉なことには、私達一人ひとりの防災・防衛意識や危機管理、身体感覚などを「火山噴火予知連絡会」なる公的な機関に吸収統合されたり依存したりするあまりに、その土地に住む私達の「①自発的協力を可能とする愛他的な動機を減少させるだけでなく、②そのための政府ないし政府類似の組織の発達が、社会的ジレンマ問題の解決のための自発的協力を育てる母体としての共同体を破壊する」という新たな矛盾を生み、人々の不信感を増殖し社会の硬直化を助長しているのではなからうか。公的な機関や組織が責任の所在として批判の対象になつても、そこに所属している人々の姿は見えない。国が悪い、行政が悪いと繰り返すばかりである。だから「家族や親類、あるいは近所づきあいのなかでお互いに助けあつて生きてきた人々の間では社会的ジレンマ問題はほとんど存在していなかったのに、このような共同体が公的な組織の発達により破壊されると、それにともなつて、今まで自発的に協

力あつていた人々も、自分の利害だけを考えるようになる」というのが現代社会の特徴であるう。

かつてはその多くの人々の職場（仕事場、あるいは生業）と住居が近くにあつて互恵互助の高い共同体を営み、人事だけではなく自然の変化にも対応してきた。ところが「近代化」の一環である文明開化・富国強兵を目標む「殖産興（工）業」によつて合理化・効率化を強行し、物質的にその共同体を分断、分解、分離してしまい、個人単位の構造、個人中心の価値観へと転換を図り、物質の消費の繰り返しによつて個人主義の風潮や傾向をさらに徹底し、物質的な進歩発展という変化によつて共同体の結束力や紐帯意識を削ぎ落し、共同体そのものをすっかり分解、弱体化してしまつた。これまで共同体によつて育まれ、共同体の帰属意識（アイデンティティ、identity）として息づいてきた義理や恥の意識、「お互い様で」「お蔭様で」「⁽¹¹⁾可惜もんだ」などという会話、「手間をかける」「骨身を惜しまない」「情けは人のためならず」などという処世観、「腰を据える」「肚（腹）を括る」「地に足がついている」などという身体技法や身体感覚、これらのいずれもが希薄化し喪失しつつある。それがまた「近代化」であり、技術や科学の「定向進化」による成果であると豪語し虚勢を張る。これは現代社会の矛盾やディレンマというよりも、人間としての尊厳そのものを傷つけ、再起不能に陥れる病理であると言つては言い過ぎであるうか。

私達は多様な自然と人々と関わり合いながら生きており、迷惑をかけない人はいないのだから、ちよっぴり「心苦しい」「申し訳ない」

という自責の念を抱いて「お互い様です」「お蔭様です」と感謝の言葉を交わし合えば社会的な矛盾やディレンマは減少し、病理は癒されるに違いない。だが、現代は増々個人主義や自由主義、さらには自由至上主義（リバタリアニズム）が希求され、国際化という名のコスモポリタニズムが叫ばれるであろう。その一方ではナショナリズム（nationalism）、国民・民族主義、パトリオティズム（patriotism）、郷土愛主義）なども根づよく論じられるであろう。そこで「イズム」の特色について紹介しておきたい。

まず、「リバタリアニズム」については、森村進氏の著書『自由はどこまで可能か リバタリアニズム入門』のなかで、用語の説明にとどまらずその内容について詳細に論じられているので、是非一読して欲しいと願いながら、その一節に「リバタリアンは、これらの環境『危機』は事実と科学的議論の裏付けもないのに誇張されていると考えられる。また地球の温暖化がかりに事実だとしても、それはこれまでの植物が育たなかった不毛な寒冷地を耕作可能な土地にするから、悪いことではないと主張する。この主張にはもっともな点があるが、現代の世代と将来の世代の利益の衝突の可能性という基本的な問題に触れるものではない。」⁽¹³⁾ という説明があり、「リバタリアニズム」も矛盾やディレンマを抱えていることを見逃すわけにはいかないが、学問の主題として改善を志向する議論として評価したい。

次に「ナショナリズム」について触れておきたい。例えば、アーネスト・ゲルナー（加藤節監訳）『民族とナショナリズム』のなかで、

「『ナショナリズム』の熱の激しさが減退することは、反エントロピー的マイノリティの置かれた状況が必ず好転することを意味するものではない。近代世界における彼らの運命はしばしば悲劇的であったし、そうした悲劇が二度と繰り返されないであろうと確信することは、気まぐれか安易で不当な楽天主義になるであろう。」⁽¹⁴⁾ という見解があり、マーサ・C・ヌスパウム、他（辰巳伸知・能川元一訳）『国を愛するということ 愛国主義の限界をめぐる論争』のなかには、「とりわけコスモポリタニズムが覆い隠し否定しさえするものは、生における所与の条件 両親、祖先、家族、人種、宗教、遺産、伝統、共同体、そしてナショナリティ である。これらのものは個人の『偶然の』属性などではない。それらは本質的な属性なのである。われわれは、自由に浮動する自律的な個人として生まれてくるのではない。（中略）コスモポリタニズムに『基本的な忠誠』を誓うことは、ナショナリティだけでなく自らの自然なアイデンティティを越えようとするのである。コスモポリタニズムはそのための立派で気高い響きをもっているが、それは幻想なのであり、そしてあらゆる幻想同様、危険なものである。」⁽¹⁵⁾ という意見もあり、「リバタリアニズム」にとっても参考になるであろう。いずれの「イズム」が人間の真理を明らかにし、理想に近づいていく正論なのか私には理解し難いのだが、今は亡き恩師・淺野晃先生の慈眼と共に、御高著『主義にうごく者』を思い出す。そのなかには、

インテリが、こんな窮屈な擬似軍隊的な組織の中へ、みずから大挙してはいって行く。ここに現代における東方の悲劇がある。彼等が求め得たとした思想の自由は一体どうなったのか？ だが彼等はすでにインテリとして、外来的な抽象観念のとりことなつていゝ。彼等は庶民一般とまったく別の生活気分支配されているものであるから、極言すれば一時的にせよ祖国を失つていゝ。すなわち国土とその歴史とに繋がつた生活、その生きた伝統的な生活感覚を、一時的にせよ麻痺させてしまつたのである。トインビーの定義に照らして、東方の『後進国』は、こうしてインテリ種族を大量に養成せねばならなかつたのだから悲劇であつた。この悲劇は、明治初年の文明開化と富国強兵の方針決定このかた、れんめんとしてつづいていゝ。⁽⁶⁾

とあり、御自身（明治三十四年八月十五日、滋賀県大津市生まれにして平成二年一月二十九日、東京都千代田区の病院にて逝去、享年八十八歳）の体験を回顧しての見解だけに、私は「東方の悲劇」を断ち切るためにも「東方の悲劇」の真意や真相について熟考を重ね、恩師の教えに報いられるように精進したいと思つばかりである。

さて、浅野晃先生が身をもつて指摘された「東方の悲劇」は、当時に限らず今も猶「れんめんとしてつづいていゝ」ように思われてならない。現代に於ける「この悲劇」は、「文明開化」という「脱亜入欧」から技術や科学の「定向進化」によって創出された様々な道具や機器

の普及と、その手段に依存することによって生じた人間関係の分裂、人間の孤立化、心の歪みなど、かつての「インテリ」にとどまらずに広く大衆に蔓延しているところが現代の「悲劇」の特徴である。何物（事）でも便利で安価で、高品質、高性能、多機能、小型で軽量な新しい機器をみんなですべて所有することの自由と平等の安堵感は、さらなる「定向進化」によって刷新されたものの出現に伴つて疑心暗鬼による不安や不満を生み、改変されたものの買い換えを強いられ、欲望への衝動を生むのである。新しいものの溺愛は刹那的に新しいものを迎え、短絡的に新しいものを捨てて一向に省みない。古典的な「温故知新」という箴言を忘れたかのように慎重さを欠き、節度のない放漫な状況を拡散するばかりである。大量生産、大量消費、大量廃棄の「定向進化」によって生みだした数々の問題を、どのようにして解消するのであるうか。深刻な苦悩の連続なのだが、それは自己矛盾を抱えたまま愚行を重ねて生きる人間の一面的な生態を如実に露呈したものでなかならうか。

今や、かつての互惠互助に満ちた共同体が解体され、共同体が果していた暗黙の牽制や抑止、制裁、浄化、協力、慰安などの利他愛的な効力や機能が失われ、公的な機関や行政の名をもってコスト（公共事業や公的支援という名の費用や負担）が支払われるようになった。私達は多くの機具や機器、そして情報と呼ばれる音声や文字、映像などに依存すれば、それだけ個人的なコストもかかり、その手段や量によって利害得失の差異が明確化し、人間性までもが物質に嘖まれ疎外され

やすくなるという無機質にして無神経な悲劇も生じやすくなるのである。つまり、「流行^{はや}っているから」と言い、「みんなで渡れば怖くない」「みんながやるから私もやる」「私ひとりだけでは嫌^{いや}だ」などという口実や判断が悲劇の元凶であり、「ゴミを不適切に捨てるのは悪いことだ」とか、「自動車などの排気ガスによって大気が汚れる」ことなどは、すでに多くの人々が承知しているにも関わらず道路の傍にはゴミが捨てられ、排気ガスが一因と指摘されている温暖化や酸性雨、オゾンホール、環境ホルモンなどが一向に改善されないのはどうしたことであろう。ゴミの収集や処理に必要な費用、水質や大気の浄化にかかる費用などは年々増加するばかりで、経済成長、経済効率を叫びながら外部不経済に逆襲される人間の矛盾やディレンマを痛感することはほど思かな悲劇はないであろう。

こうした悲劇は、かつて我が白鳥省吾に「戦にのみ備へて日常生活の自覚なかりし日本よ」「矛盾と虚偽に曇る日本よ」などとうたわれた「日本」や、浅野晃先生が指摘された「東方の悲劇」にとどまらない。即ち、「日本」という国や「東方」という地域を超えて人々の心を蝕み、人間が無機質化・物化^{もの}されていくことを危惧し怖れていたのである。省吾は次のようにうたっている。⁽¹⁷⁾

土地

土地の持つ微妙な力は

魔術的な美と歓喜である
限りなき恵みである
けれども私は一坪の土地も持たない。

一粒の種子は土を萌え出で
青き葉をそよがせ花を匂はせて
やがて無数の実を結ぶ、
一木の苗木は丈高く繁り花咲き
年毎に無数の果実をつける
或は草花の種子や球根は
新しい光の中に芽ぶき躍り出で
それぞれの美しい花をつける、
おお吾等の周囲を飾つて
血と肉と心とに休みなく糧を与へる
その燦爛たる眺めよ。

おお土地の歎びよ、
牧場には牛や羊が遊んでゐる
樹立には小鳥が歌ひ光の中を蜜蜂が飛んでゆく
蝶は軽くとび蟻はいそいそと歩いてゐる、
少しばかりの土地をも楽園として養鶏が行はれてゐる
卵の殻を破つて出た雛鳥は

可愛らしく賑やかに親鳥の傍に育つてゐる。

地上に生くる人間にとつて

土地は魚の水に於ける如きものだ、

私は土地の美と歡喜と賜物とを知る

けれども私は今一坪の土地も持たない。

ああそれは私一人の悩みではない

都会に於ては勿論のこと

田園に於ても実に国民の大多数は土地を持たない

地上に生きてゐながら土地を忘れて生きてゐる。

省吾が「地上に生きてゐながら土地を忘れて生きてゐる」ことに気づき、一篇の詩としてまとめてからすでに八十年もの歳月が流れ、「都会」の人々に限らず多くの人々の心も変わり、「土地の持つ微妙な力」も変わつてしまつた。これらの変化を、またしても進歩発展の証左であると嘯き居直るべきなのであるか。文明開化に遅れた「東方の悲劇」は、今や「文明」そのものの矛盾によつて苦しめられるという皮肉な広がりを見せている。文明こそがグローバリゼーションの先駆けをなし、文明にこそグローバル・スタンダードと称する規範や規制、倫理観を課すべきであると言つてはあまりにも無知蒙昧な妄言に聞こえるであろうか。文明はその都市にとどまらず、地方の田園や身心に

も広がり、悲劇の国際化とでもいふべき弊害が蔓延しつつあるのはどうしたことであろうか。今や、文明の果たすべき命題は、人間の心について考察し、善悪を判断できる健全な心を育成するために寄与することが先決にして急務なのではなからうか。

(三)

悲劇 私はフランスの古典的な劇作家・モリエールの『ミザントロプ』（一般的には『人間嫌い』と訳されているが、辰野隆は『孤客』と訳している）の主人公・アルセストの台詞や、シェイクスピアの『リア王』にて語られている「リア王」の台詞などを思い出し、心の有り様について考えざるを得ないのである。モリエールは主人公のアルセストに次のように語らせている。

フィラント（アルセストの友人）では、あのドラリスにも、宮中

では誰も彼も、例の武勇談や家柄自慢はもう聴き飽きていますと

言つのかい？

アルセスト そうとも。

フィラント 「冗談を。」

アルセスト 「冗談どころか。そこへゆくと、僕は誰も容赦しないね。

僕はもう視るに忍びない。朝野をあげて、目に触れるものはこごとく憤慨の種だ。世間の奴らの生活ぶりを見てみると、暗

い気持ちになって、深い苦惱くなうに閉とされる。いたるところただも
う汚くらわしい阿諛あごん、不正、打算、背信、奸策けんさくだらけだ。もう我
慢まんできない。気も狂くるうばかりだ。僕は断然だんぜんあらゆる人間に真向
から挑たみかかるつもりだ。⁽¹⁸⁾

今日の私達には、文明によつて発生した矛盾やディレンマを少しで
も削減し、改善に向かう未来を構築するためにも、不正を「容赦しな
い」と挑たみかかるアルセストのもつヒロイックな心情、打算や阿諛あごんを
潔けつしとしない瘦我慢しゆがまん、無分別、無鉄砲さ、背信や奸策を許さない心意
気、気概、即ち、正しいことを希求し、美しいものに憧れる情意、価
値観、哲学、感性、正直さなどが必要なのではなからうか。人間であ
るアルセストを「人間嫌い」にさせ、人間不信を掻きたてるような
「悲劇」が、作者のモリエールの死後、すでに三百数十年も経つとい
うのに未だになくならないのはどうしたことであろうか。この世
は矛盾やディレンマ、悲劇や皮肉に満ちたまま救われないのであろう
か。シェイクスピアの『リア王』(福田恒存訳)もまた、実子である
姉妹との骨肉の争いの果てに悲痛な叫びと呪いの言葉を残す父・リア
王の悲劇やディレンマを描いているのだが、人はみな悲劇のなかを生
き抜く他はないのであろうか。リア王の叫び声を聞こう

コーディリア(リア王の三女) 別に私達わたしが始はじめてという訳では
ありません、最善の志を懐いだきながら最悪の事態を招いたためし

は珍めづしくない。ただお父様が、国王の御身でこの苦しみ、それ
を思うと心も挫くけます。私わたしだけなら、移気な運命の女神めがみの険し
い額ぬかなど平然と睨にらみ返してやれますのに。お会いになりませぬ
か、二人の娘に、姉上あねさまに？

リア(ブリテン国王) 会あわぬ、断ことわじて会あわぬ！ さあ、牢らうに連れ
て行いつて貰もらおう、お前と二人だけになって、籠かごの中の鳥の様に
歌うたうのだ、俺の口から祝福の言葉が欲しいと言いうなら、俺はお
前の前に膝ひざまずいて許ゆるしを乞こう事にしよう。そんな風にして生
きて行いきたい、祈いのつて、歌うたつて、昔話むかしをして、綺羅きらびやかな蝶
の群むらを笑わらい、賤せしい者共ものどもがそういう宮廷の噂うわさをするのを聞いて
いよう、俺達もそいつ等に混まつて話わをするのだ 誰たれが負まけた
の、誰たれが勝かつたの、やれ、誰たれは羽振はねりが良いの、誰たれは落ち目だ
のと そして如何にもしたり顔かまに、この世の不可思議は何で
も解とき明あして御覧ごらんに入いれると、あたかも神意を呑のんだ天使で
でもあるかのように振舞まわりたいものだ、出来ればなお生き延び
て、壁かべに閉とじ籠かごめられた牢屋らういの中から、世の大物共おほなものどもの離合集散
の姿を月と共に差し引きする潮うしほの動きを、眺ながめながら暮くしたい。⁽¹⁹⁾

と語かたつたあと、リア王とその娘・コーディリアは牢らうへと番兵に連
れ去さらられていき、やがてコーディリアは獄ごく中ちゆうにて絞殺しやくされ、三人の
娘の死を知しった老齡らうれいのリア王もまた絶望ぜつぼうのあまり、その後を追うよう
にして息絶いきえてしまうのである。リア王の死を見届みとけたエドガー(グ

ロスター伯爵の息子）の台詞をもって、孤独で虚飾に満ちた愚かな人間悲劇を描いた『リア王』の幕は閉じられるのである。エドガーとはリア王の長女・ゴネリル、次女・リーガンが共に恋したエドマンズの腹違いの兄であり、リーガンはゴネリルに毒殺され、エドマンズはエドガーの刃に倒れたのである。

エドガー この不幸な時代の重荷は吾々が背負って行かねばなりませぬ、言うべき事がどうか、とにかく己れの感じた事を在りのままに申しませう。最も老いたる者が最も苦しみに堪えた、若い吾々は今後これほど辛い目に遭いもしますまい、これほど長く生きもしますまい。（死骸が運び去られ葬送曲と共に一同その後⁽²⁰⁾に随⁽²¹⁾う）

『リア王』の発表は一六〇五、六年頃と推定されているのだから、今や四〇〇年になるうとしている。人はいずれも古い御伽噺に過ぎないと一蹴するかもしれない。しかし、「温故知新」「落葉帰根」とばかりに先師の英知を掲げるまでもなく、古典のなかに描かれている悲劇こそが自然と人間の共存や共生を目指しながらも、技術や科学の「定向進化」を強迫観念の如く盲信する進歩発展至上主義や進歩発展依存症のあまりに自然の改悪を招き、環境の悪化を払拭出来ない人間の矛盾やディレンマを予見し、その本質や命題を忠実に反映しているのではなからうか。

息づいている古典の例として紹介したモリエールの『孤客（ミザントロオプ）』にしろ、シェイクスピアの『リア王』にしろ、いずれも人間の生き方についての物語であり、生き方を探求しているからこそ数百年の時を経て猶も新鮮味を保持し続けているのである。人間如何に生きるか、という問は洋の東西を問わず根本的にして不朽の命題であるが故に、学問的にもグローバリズム、インターナショナルイズム、コスモポリタニズムを志向したり、ローカリズム、リージョナリズムを提唱したり、あるいはまたリベラリズム、リパタリアニズム、そしてナショナルイズム、パトリオティズムなどなど、様々な「イズム」が主張され研究され、色々な議論があつて然るべきなのである。私もまた昨今に於ける多種多様な事件や事故を含む事象を眼の当たりにしながら、国際化を標榜し情報の獲得に追われ、技術や科学の「定向進化」に強いられた物質依存症候群とも変化期待症候群とも言つべき人間性の偏重、歪み、弊害などを生み出す人間の矛盾、ディレンマを痛感し「人間の悲劇」を思い、人間不信の「人間嫌い」に陥りかねないのである。例えば、ウオークマンやコンパクトデッキのイヤホン、ヘッドホンを、さらには携帯電話を長時間使用し続けることによって生じる難聴⁽²²⁾、瘦身や美顔への強い願望によって生じる身体加工症（自傷も含む）や拒食症、逆に肥満に至る過食症、テレビやビデオなどの映像ばかりを相手にする仮想幻想、錯覚症候群、依存症や対人恐怖症、孤食や引きこもり症候群などが思いつくのだがどうであろうか。先月の新聞の「文化」欄には、「吉本隆明TVを読む」「引き出し」症候

群にこそ注目を」という見出しに続いて読んでみると、「ランチメー
ト症候群」というのがあるとして、「症状は昼の食事をひとりとする
ことができず、同僚と一緒にとるために、無理にも仲間を求めずには
おられない。理由は独りぼっちで食事をとるのが淋しい、また職場の
同僚から疎外されていると思われたくない。そんな理由で前の日から
携帯電話などで明日の昼食を一緒にとってくれるよう頼んだりするま
でになっているそつだ。」という。「このような「症候群」の一因につ
いて、筆者の吉本隆明は次のように説明している。⁽²²⁾

わたしは森首相の「神の国」発言も好きではないが、「IT革命」
発言も好きでない。インターネットの網状化は発達して世界を覆い、
交通手段や情報伝達の装置は飛躍的に高度化してきている。これを
謳歌しなければ、ほかに無条件に謳歌できるものなどないと言って
もいいほどだ。しかし情報科学の専門家や、情報技術の応用開拓者
は、先頭になって誤解を広めている。情報伝達の手段は発達すれば
するほど、有効さや便利さを増加させる。しかしその本質は「意味
量」の増加を第一義とし「価値量」の増加は、それに付帯するに過
ぎない。「価値量」を第一義に増加させるためには、ディスコミュ
ニケーション、引きこもり、気も狂わんばかりの忍耐力がどうして
も、必要になる。これは科学者から染め物職人まで一向に変わらな
い。女性の憧れの職業である女優や女子アナや演歌の歌手といえど
も、舞台に出ているときよりも暮夜ひそかに演技や話術や発声の修

練のため引きこもっている時間が多くなければ持続的な職業となし
えないに違いない。

わたしは「引きこもり」症候群に一括される異常や病気よりも
「引き出し」症候群とでもいうべき技術文明と文化の方に、精神医
学者は注目すべきだし、その対症療法を準備しておくべきだとおも
う。

なるほど言い得て妙とはこの事であろうと机を叩いた。現代には他
にも色々な「症候群」がある。事実、深刻な症状をもつものもある
だろうし、すでに重い病気や取り返しのつかない犯罪に至ったものも
ある。また、情報の発信を自負するマスコミと称する報道機関が先
見の明を銜って名づけたものもある。いずれにしても、ここには人
間の矛盾やディレンマがあり、悲劇がある。自由や平等、個性や人権
の尊重を教育や法律・政策・制度などの基本的理念に掲げながら、画
一的にして均質的なものの取得に主眼を奪われて実質的には不自由・
不平等を余儀なくされ、不本意なものに強制され、大衆的なものによっ
て統制されているのである。

多くの人は真理や真実の探究と称して「イデオロギ」の説明に心血を
注ぎ、事実に伴う情報の開示を求めながら、その真実は一向に明らか
にされずその理想に近づかないのはどうしたことであろうか。むしろ
複雑にして不可解な、過激にして悲惨な事件や事故が頻発し、多種多
様な「症候群」が発生するという皮肉やパラドックス（逆説）、脱皮

し難い陥穽についてどのように理解し、どのように取り組んだならば
 解明改善されるのであろうか。またしても技術や科学のさらなる「定
 向進化」を待つべきなのだろうか。市場原理による経済の活性化、発
 展によって解決するのであろうか。民主的な法律や制度によって解消
 されるのであろうか。あらゆる矛盾やディレンマは自然と人間の

本質的な差異、異質さ、分離などから必然的に発生していると思われ
 る。省吾が「地上に生きてゐながら土地を忘れて生きてる」と指摘し
 た暮らしの必然であり露呈である。即ち、その土地が秘めている力
 （地力^{ちりよく}）に依存しながら生き永らえているという事実を忘れてはなら
 ないのである。

多くの先師は自然と人間の生態を吟味し、その矛盾やディレンマを
 少しでも抑制しようと難行苦行に身を投じ、永年の研究を経て貴重な
 高説を残してきたではないか。その一つが「運命随順」や「自然法爾」
 の境地を体得した老荘の思想である。老子は「夫れ物の芸芸たる、各々
 其の根に復歸す。根に歸るを静と曰い、是れを命に復すと謂つ。命に
 復するを常と曰い、常を知るを明と曰い、常を知らざれば、妄作して
 凶なり。」⁽²³⁾と云い、莊子は「彫琢して朴に復り、塊然として独りその
 形を以て立ち、紛として封戒し、一に是れを以て終わる。」⁽²⁴⁾などと述
 べている。これらの訓話を朗唱しながらそこにある真理を理解するこ
 とによって、技術や科学の「定向進化」による物質依存症や進歩発展
 至上主義、機械万能主義、消費快楽主義などのイデオロギーの呪縛や
 強迫観念から解脱し得るのであろう。やがては生きている事実を素直に

喜び合い、生命の神秘を単純に驚き、風と戯れ、花と語り合うような
 素朴な暮らしによって、人間の歪みや矛盾、ディレンマは少しずつ消
 滅していくのであろう。まして作為的な国境やイデオロギーを巡って争
 う愚かさにも覚醒し一つの世界に近づいていくことであらう。それが
 人為を超えた自然の必然なのである。 私が愛読する白鳥省吾の詩
 集『共生の旗』の主題もまた、「旗」が象徴する自然と共に生きよう
 という悲願である。その悲願を胸に秘めて身近な自然と関わり合いな
 がら暮らせば、心から「生と死とはかくも近い」という一つの世界を
 知り、「国境」を超え「矛盾」の解消に至るのであろう。 省吾の数々
 の詩は死を知る生なる者による共生への悲願であり、共生へと導いて
 いく旗は一本で足りるのである。

（ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授）

〔注〕

- (1) 白鳥省吾の詩集『共生の旗』（新潮社、大正十一年六月十日発行）一七
 三―一七四頁。「地の叫び」の章より引用。
- (2) 三好達治の詩集『測量船』のなかの「乳母車」より引用。
- (3) 河原宏『素朴への回帰 国から「く」へ』（人文書院、二〇〇〇年
 七月三十一日発行）八十三―八十四頁。
- (4) 注(3)に同じ。一〇六頁。
- (5) 小島朋之氏（慶応義塾大学教授）は、去る平成十三年八月二日（木曜
 日）付の「読売新聞」朝刊の「論点」のなかで、「グローバル化が進行す
 る中でも、生まれ育った国、帰属する民族に愛着を感じるナショナリズム

をもつことは非難されるべきことではない。非難すべきは、他者のナショナリズムを侮蔑あるいは無視するナショナリズムである。多様なナショナリズムの存在を認め合つてこそ、グローバルな共生は可能になる。」と述べていた。民主主義が掲げる「自由」「平等」「博愛」と共に「個性の尊重」と同じ論旨なのだが、今日の日本に於いて、「個性」を認め合い、尊重し合つていのであるうか。むしろ、「個性」を抑制し合い、「自由」を口実にした安易で安っぽい「個性」による見せかけだけの「平等」に陥っているのではなからうか。「個性の尊重」を謳う日本に「いじめ」の事件が絶えないように、グローバル化の反動にして、逆行するかのような「多様なナショナリズム」の一部が、日本の「いじめ」に等しい暴力を振るうように思われるのだがいかがであるうか。

(6) 注(1)に同じ。十一 十四頁。「広野の部落」の章より引用。

貢
(7) 白鳥省吾『詩と農民生活』(春陽堂 大正十五年二月二十八日発行)四十一頁。

葉
(8) 高見順の詩集『死の淵より』の「帰る旅」のなかに「この旅は／自然に帰る旅である／帰るところのある旅だから／楽しくなくてはならないのだ／もうじき土に戻るのだ」という一節がある。是非、一冊を味読していただきたい。

(9) 山岸俊男『社会的ジレンマ 環境破壊 から「いじめ」まで』(P
HP新書一七、二〇〇〇年七月五日発行)十一頁。

(10) 注(9)に同じ。一〇六頁。

(11) 注(10)に同じ。

(12) 「可惜」の語義については機会あることに説明してきた。関心のある方は、小著『可惜』命の文学(双文社出版、一九九一年十二月五日発行)のなかの「土」と『可惜』命の文学(二十九頁以下)や「土」と『可惜』の精神(四十七頁以下)の章などを一読していただければ幸いである。

(13) 森村進『自由はどこまで可能か リバタリアニズム入門』(講談社現代新書、二〇〇二年二月二十日発行)二〇二頁。

(14) アーネスト・ゲルナー(加藤節監訳)『民族とナショナリズム』(岩波書店、二〇〇〇年十二月二十二日発行)一九一頁の「第八章 ナショナリズムの将来」より引用。

(15) マーサ・C・ヌスバウム他(辰巳伸知・能川元一訳)『国を愛するということ 愛国主義の限界をめぐる論争』(人文書院、二〇〇〇年五月三十日発行)一三一―一三三頁、ガートルード・ヒンメルファープ「コスモポリタニズムの幻想」の章より引用。

(16) 浅野晃『主義についてく者』(日本教文社、昭和三十年五月二十五日発行)六十二頁。

猶、愚生の今は亡き恩師・浅野晃先生の思想なり人なりについて関心のある方は、先生の多くの著作(評論集、詩集、詩集『寒色』)によって、昭和三十九年二月、第十五回読売文学賞(詩歌・俳句部門)受賞(を讀まれることをお勧めしたい。近年には辻井喬氏(本名・堤清二)が、日本経済新聞」に連載(一九九八年十二月十五日より二〇〇〇年四月二日)していた小説『風の生涯』のなかに実名・浅野晃にて登場し、大正の後半にあたる学生時代から昭和の前半にかけての交友関係が詳細に描写されていたのでご存知の方もあろう。小説『風の生涯』は新潮社より単行本になって出版(二〇〇〇年十月二十五日発行、上下二冊)されると共に、第五十一回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。一読していただければ幸いである。

(17) 注(1)に同じ。一八九頁。「地の叫び」の章より引用。

(18) モリエール(辰野隆訳)『孤客(ミザントロップ)』(岩波文庫、一九五〇年九月五日第一刷発行、一九七八年三月十日第二十三刷発行)十頁。

(19) シェイクスピア(福田恒存訳)『リア王』(新潮社文庫、昭和四十二年十一月二十五日初版発行、昭和六十二年九月三十日第四十刷発行)一五八頁。

(20) 注(19)に同じ。一七四頁。

(21) 平成十三(二〇〇二)年九月十四日(金曜日)付の「河北新報」(本社、宮城県仙台市)朝刊は「東北大学電気通信研究所グループ」の研究結果として、「日本の若者は騒音に鈍感?」「低い聴力保護意識」「難聴がまん延の

恐れ」などという見出しを掲げて報告していた。

(22) 「朝日新聞」二〇〇一（平成十三）年三月十四日（水曜日）付の朝刊。

(23) 『老子』（小川環樹訳注、中公文庫、一九七三年六月十日初版発行、一九七七年三月十八日改版発行）四十三頁。上篇、第十六章。

(24) 『莊子・内篇』（金谷治訳注、岩波文庫、一九七一年十月十六日第一刷発行、一九九四年六月六日第三十六刷発行）二二二頁。

附記

この小考をものするにあたり使用しました白鳥省吾の著書や研究書等の購入、あるいは白鳥省吾の家郷・宮城県栗原郡築館町を中心とした近隣地域での資料収集や巡検等の費用には平成十一年度の高崎経済大学特別研究奨励金や高崎経済大学後援会より頂戴した研究助成金を活用いたしましたことを申し添え、関係各位の御高配、御支援に対し謹んで御礼申し上げます次第であります。

また、小考に関連する一端につきましては、平成十二年度全国大学国語国文学会秋季大会（於・神戸の甲南女子大学、平成十二年十月十五日）にて「民衆詩派の詩人・白鳥省吾『土俗の精神』考 郷土愛を貫いて」と題して研究発表を行いましたので感謝を込めてご報告申し上げます。